
v i v i dって何だろう？

餅っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

v i v i d って何だろう？

【Nコード】

N 3 0 6 2 Z

【作者名】

餅っち

【あらすじ】

私が今連載中のISのSSの主人公の弾がもしもリリカルなのはの世界に転生していたらという、ある意味IFのお話です。
息抜き&電波受信MAX状態&IS本編優先のため、更新は遅めと
いうか、そんな状況です。

そして、駄文ですが、それでも構わない！と言う方はどうぞ。

第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ（ドヤア）！！と考えている内は幸

輪廻転生。

いきなりなんのこっちゃ？　と言いたくなるだろう。

俺だっけ見ず知らずの人間からいきなりこんな事を言われたら、まあ、なんだな引くな。

そんな言葉、輪廻転生というものを俺は体験した。

二次創作とかSSとか言われている奴で言われている【神様転生】って奴だな。

まあ詳細は割愛するけれど、イロイロな特典貰った俺は転生したんだよ。

神様（おっぱおの大きい女神様でした。あのマシュマロの感触は今でも覚えてます……）が言っていたある世界に転生したはずなんだが、生まれて今現在8年の月日が流れている。

因みに、この世界について大体の予想がついたのは四歳辺りの頃だったかね、ミッドチルダ、んでもってベルカ……　という二つの地名。

そして、俺が住んでいるのはミッドチルダとベルカの間にある都市。

もしかして、あの、お話と書いて【全力砲撃でブッ飛ばす！！】という恐ろしい魔王様が大活躍するリリカルで、なのはな世界じゃあるまいな！？

そんなことを考えながら俺、こと【ダン・ゴタンダ】はS.t魔法学院小等部に入学したのだった。

無論のこと、今いるこの世界が魔王様達が活躍する時代でないことを切に祈りながら……

もちのろん、俺の儚い希望は打ち砕かれたのは言うまでもない、え、どうしてかって？ 新聞に載っていたからだよ。

エース・オブ・エースこと、高町なのはを含めた原作三人娘の写真がな……

……………普通に目立たないように過ごしていれば、なにも、何も問題よね！☆

原作に確実に巻き込まれる呪いも特典でつけた、とかあの女神は戯言を言っていたけど、俺の方から原作キャラと言う存在から、後ろに向かって全力ダッシュすれば問題ないよね！！

「……？ さっきから、変な顔をしています、どうかしたんですか？」

「ああ、いや、なんでもない、なんでもないぞアインハルト」

「そうですか」

なんて考えながら、教室で一人で百面相をしていたからだろうか、目の前にいる地球の日本で言う所の幼稚園に入る前からの付き合いの幼馴染と言うか、腐れ縁の【アインハルト・ストラトス】が疑問の色を浮かべた顔で問いかけてくる。

な〜んか、アインハルトとの付き合いが始まってから思うのは、とつくに詰んでいるという感覚なんだが、気のせいだろうか？ 原作は第二期までしか知らないから、なあ。

まあ、良いか。

なんて考えるのだった。

く vivid って何だろう？く

く 第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ（ドヤァ）！！と考
えている内は幸せだったく

小等部に入学してから、三年と言う時間が経過しているんだが、俺の友達と言うか、付き合いのある人間はアインハルトしかないなかったりする。

俺自身の精神年齢が前世と合わせて二十代前半と言えることなどからか、小さい子供達と会話の波長と言うか話題が合わなかったんだよなあ。

その上に転生特典で貰った能力とかの鍛錬もあったことで、余計に俺の周囲からはアインハルト以外の人間が近付かなくなっていた。

と言うのもあるな、この時期はやっぱ自分とよく遊んだりとか、近い精神の連中とでつるむ事が多いからな。

それも影響したんだろう、何時の間にやら俺はいつも登下校をアインハルトと共に過ごし、学校内でも彼女と一緒にずっと過ごしていた。

「あ、アインハルト、今日も家で晩飯を食っていくか」

「はい、厳さんに呼ばれてますし、ご迷惑じゃなかったら、ですけど……」

「んじゃ、決まりだな」

「はい、今日もお世話になります」

「そこまで気にしなくても良いと思うんだけどな」

その上にだ、どうもアインハルトの両親と家の両親と祖父さんが知っているもの同士のように、彼女の両親は仕事の都合からか良く家を空けるために、日本の定食屋ともいべき店をやっている家でアインハルトは晩飯を食っていくんだよな。

まあ、何故かアインハルトも店を手伝う、とか言って今では看板娘のような感じになっているから、店にとってはありがたいんだけどな。

ただ、あの爺の強さだけは納得がいかない……。どうしてニアSの魔導士を生身で、魔法を使うこともなく一方的に凹れるのだろうか。

相手は犯罪を犯して逃走中の魔導士だったんだが……。見ているこっちが辛くなるほどの一方的なジェノサイド・ゲームだったのには、かなり驚かされた。

それはそれとして、俺は律儀と言うかなんと言うか、と言った具合のアインハルトには苦笑を禁じえないのだった。

こいつはかなりしっかりとした教育と言うか、そんな感じのことを受けた所為だろうか、いつも丁寧な言葉で喋るし、受けた恩は毎回キツチリと返す奴だ。

「そんな訳にはいきません、ダンのお爺様には大変お世話になってますから」

「爺さんも母さん達も気にするなって言ってるのに、頑固な奴だよね前は」

「頑固で結構ですよ…… それに受けた恩をそのままにしていたら、ダンと同じ所に、あなたの隣に立てないじゃないですか……」

コイツの頑固さは折り紙付だ、なにしろ俺の名前を呼び捨てにしてくれたのも最近だしな。

アインハルトとの馴れ初めだって？ まあ、それは後で語るとするさ、長くなるし何より、詰んでしまった気がする感じが強まるかな。

ただ、小声で言った何かが良く聞き取れなかったんだが、何を言っただろうか？ 聞いてしまったら取り返しのつかないことになりそうでもあるから、気にしないことにしよう。

そんなこんなで、俺の家に着いた後、アインハルトと俺は店にエプロンをつけて出て行くのだった。
さてと、これからは戦場だ!!

「ダン! 5番と4番のテーブルにこれ運べ!」

「了解!!」

今は夜の18時である。

立派な夕食時といえる時間帯、それは我が家こと【五反田食堂】も例外ではない。

席は全て一杯に埋まり、カウンター席も同様である。

そんな中で、俺とアインハルトは料理の配膳とメニュー取りに大忙し!といった具合に働いているのだった。

「ご注文を繰り返します、業火野菜炒め定食がお一つ、カレイの煮つけ定食がお一つの以上二つでよろしかったでしょうか?」

『大丈夫よ、今日も精が出るわね、アインハルトちゃん!』

「ありがとうございます」

笑顔はぎこちないながらも注文をキッチリと取るアインハルトの姿は、五反田食堂の一種の名物と言うか、そんな感じにもなっていたりする。

何しろ恐らくだが、アインハルト目当ての客が何人かいるしな、まあ、今はもう一人、俺の妹も店を手伝っているからな、妹目当ての客もいるんだろうさ。

見た目は美少女で尚且つ、クールビューティーと言える外見なんだしな、人気が出ないほうがおかしい。

幼馴染補正を抜いて、しかも小学生だから、将来は無茶苦茶なレベルの美人になるのは間違いないだろうな。

まあ、それもあるが今の俺の体勢を見物したい客も多いけどな、何しろ。

「4番テーブルかばちあの煮つけ定食と焼き魚とフライの盛り合わせ定食に業火野菜炒め定食お待ち!」

『いやーやっぱダンくんのこの姿を見ないと、ここで食ってる気にならないな!』

『だよな、両手に一つずつに両肩と両肘にまで皿を乗せて運ぶ姿を見ないとな』

「5番テーブルカツどん定食と天井定食にカレイの煮付け定食お待ち!」

『お、ダンくん精が出るな!』

『相変わらず変わった運び方って言うか、すげえ運び方するよな』

お客さんの一人が言っていた通り、俺の体勢はと言うと両手、両肘、両肩に一つずつのメニューを載せて運んでいるのだよ。

え、どうしてできるのかって? 慣れだよ、慣れ。

人間、死ぬ気でやりゃあ何でもできるもんさあ。

それに身体能力も常人からかけ離れていることだしな、それが原因でもあるだろう。

だけど…… アインハルトの身体能力も同じ様に感じるのは気のせいだろうか? それに将来、俺が彼女に捕まるイメージも浮かぶのは、気のせいだと思いたいなあ!!

その後は、まあいつも通りに俺とアインハルトは爺さん作の夕食を食って、俺が彼女を家まで送り。

俺は家に帰って寝ていたんだが次の日は管理局の後悔意見陳述……なんだっけ？ 公務員にしては珍しいといふかなんと言おうか、と考えたもんだ。

何しろ、後悔、という言葉が入っていたんだし。

配られたプリントは見ていないし、年老いた爺さん教師の言葉だけしか聞いていなかったし、ニュースも見なかったからな、なんかその後起こった事件が原因で、その日から夏休み並みの長期の休みになったというくらいしか聞いていなかったんだけど。

それから数日後、俺は寝惚け眼で自分の部屋のカーテンを開けると、そこには。

「……………なんぞ？ あのでっかい空中戦艦……………」

何か知らんが、でっかい空中戦艦が浮かんでいました！！☆
周囲には変な光が光ったり消えたりしていることから、管理局の艦でないことは明らか、恐らくはなんかの敵対している勢力のものなんだろうが。

このまま起きていたら、面倒なことになりそうな予感を感じたの

で、俺は!!

「寝よ」

と言ってベッドの中に入るのだった。
だが。

「オラァ!!何を寝ていやがるダン!!」

「じ、爺さん!?!」

「街中に妙な機械が現れて皆が戦っているってえのに、手前はアイ
ンハルトちゃんを守りにもいかねえってのかい!?!」

「いや、は? そんな機械が街中を襲ってるのかよ?」

「四の五の言っただけでさっさとあの娘を迎えに行っ、一緒に避
難しろ!!!」

そういつて窓から追い出される俺、っていうか目の前に変な円筒
状の物体がいるんですが!!!?

その変な機械、後から知ったら【ガジェット?型】と呼ばれてい

たそれが、レンズの部分から放って来たレーザーを全て俺は。

「のわああああ!!!!?」

全弾を空中で回避した。

「なんだよ、ったく!」

爺さんにわけも分らずに叩き出され、まだ眠い俺、目の前にいるのは良いストレス発散対象、そう俺の脳は認識して一瞬で俺は変な機械に肉薄し。

「詠唱はなんぞ覚えちゃいないが、雷の暴風……モドキ!!!!」

イライラと全ての怒りが乗った一撃を放ったんだが…… あ、やっべ、やりすぎた……

何しろ、俺よりも少し上を飛んでいた機械と、その群れを消滅させただけに飽き足らず、でっかい空中戦艦の推進部と思しき部分に

火柱が……

上昇するスピードがちょこっと、心持ち落ちたような気配を感じた後、冷静となった俺が取った行動は。

「うん、アインハルトと一緒に避難するか」

だった。

無論のこと、俺は自分自身の魔力を隠蔽して、アインハルトを探していたけどな。

その後の顛末を語ると、簡単だ。

家でフルフルと恐怖で震えていたアインハルトを保護して、一緒に避難所に駆け込んで保護してもらおうとした時に、襲い掛かってきた機械数体をなんでもありの卑怯な戦法で撃退、なんかアインハルトに変な目で見られつつも、避難所にたどり着いて保護してもらった。

その後は、機動六課、だったけ？ の活躍で空中戦艦は撃沈されて終了！

といった具合だったようだ。

ただし、どうも、空中戦艦に1撃を与えた魔導士のことが気になったらしく、暫くの間、ピンクのポニーテールの巨乳なバトルジャ

ンキーの女性や、赤い髪を持った、かなり気の強いロリッ娘、などが俺の家がある周囲をうろついていたんだが、ロリッ娘と知り合った以外は何もないと言いたい。

まあ、鉄槌の騎士ヴィータと烈火の将シグナムなんだが…… 気づかれてないよな？ 気づかれてないよね？

なんて考えて、俺はベッドの中でブルブルと震える日々を過ごしたのだ。

第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ（ドヤァ）！！と考えている内は幸

このSSのダンは基本的にIS本編のダンと見た目は一緒です。

後は基本的なスペックも同等ですが、年齢などによる弱体化もあります。あまり本人は気にしていなかったり……

ただ、今は魔王様の砲撃怖い、と言うのが心境を埋め尽くしております。

後は、舞台となっている第四期の原作知識が無い、というのがありますね。

なのでアインハルトが主人公であるのに、彼女と幼馴染と言う関係になっちゃった彼、どう転んでいくのかは、作者にも分かりません！

第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は愛でるもの、タツ子

何か変な状態なんだろうか、数時間程度で、一気に執筆できた……

第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高でっす！年下は愛でるもの、タツキ

あの変な空中戦艦浮上事件から4年の歳月が流れ、俺達はstヒルデ魔法学園中等部に進学していた。

え、俺とアインハルトの関係って？ いつもどおりさ、ただ……俺が好みのタイプの女性とかをグフとばかりに見ていたら、機嫌が急降下&制裁を加え始めてきたのが最近の悩みだ。

確かにアインハルトは将来有望だ、間違いなく将来は巨とはいかずとも美といえるくらいの乳をもっているのは確実！！

だけど如何せん、俺とアイツはちうがくせい、そう、まだアインハルトのスタイルは微な状況なんだよな。

だからアインハルトをそういう目じゃ見れないし、何よりも、あの時の空中戦艦の事件の時に涙を流して震えていた彼女の姿を見れば、まあ、将来的にもあんまりエロい目じゃ見れないなあ。

ぬっ！？ あのおねいさん戦闘力Gクラスだと！？ ええい、もう少し俺が歳を重ねていれイデデエ！！！！

「ダン、何を見ているのですか？」

「い、イエ、何も……」

一体何時、彼女は俺の視線が他の女性へと向けられて、しかもエロい物を含んだもの変わったことを知ったのだろうか。

金髪で黒い何処かの制服を着たおねいさんに声を掛けるべきかどうか迷った瞬間に、俺の脇腹に走る鋭い痛み。

見れば、アインハルトが目が全く笑っていない微笑で俺を見ていた。

…… なんか危険と言うか、そんなものをそこはかたく感じるのは、気のせいだろうか？

まあ、それはそれとして。

「と、所でだ、アインハルト」

「何でしょうか？」

「今日はどうするんだ？」

「そう、ですね…… 今日、その、遠慮させてもらえますか？」

「分った、爺さん達には伝えておくな」

「はい、お願いします、あと…… 明日はお邪魔させてもらいますから、そう、伝えてもらえますか？」

最近、
というか。

去年辺りからアインハルトは、家で晩飯を食う回数が減ったのだ。

理由は分らないが何かを彼女が隠している気配がある。

「だけど、彼女が言わないから俺は何も聞かない事になっているが、聞いた方が良いのだろうか。」

なんて考えていたら、彼女の家に着いた。

「では、ダン、また明日」

「おう、後、アインハルト」

「……？」
「なんでしょう」

「夜に出かけることとかあったら、気をつけろよ、最近連続傷害事件なんて、物騒なことあるみたいだし」

「……はい」

被害届こそ出ていないし、噂程度でしか聞いた事ないけど、最近、物騒なことが相次いでいるからな。

その上での忠告と言うか、そんな感じのことだったんだけど、一瞬彼女の顔が強張ったのはどういふことだろうか？

まあ、アインアルトが例のあれの加害者って言うわけじゃないだ

ろうし、俺の気の所為かね。

一瞬彼女の顔からは、隠し事がばれそうになった時のアインハルトの様子と同じものが表情に浮かんだんだが。

まあ、良いか。

後に、俺はこの時の判断を後悔することになる。

原作に関わることになっちゃまった！って意味で。

）vividって何だろう？）

）第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は愛でるもの、タッチはノーサンキュ！）

いつもと同じ帰り道、私はたった一人の友達であり、幼馴染、そして一番大切な人のダンと一緒に帰っていた。

年月が経つほどに分ったのが、ダンがとっても【エッチ】だと言うことです。

思うように成長してくれない私の体、スタイルもまだまだで、よく彼のお店に来る様々な女性達のスタイルとは私のスタイルは比べられない。

うう…… 武装形態と読んでいる私の姿は、あんなにスタイルが良いのにどうして…… なんて考えもする。

だけど、いつの間にか彼は管理局の執務官の制服を着た、とても綺麗な金色の髪を持った非常にスタイルの良い女性を、いやらしい目つきで見ている。

「むっ」

それと同時に沸き起こる私の胸の内の感情。
私はその感情に心当たりはついている。

嫉妬、それだ。

私が隣にいるのに、どうして彼はすぐに他の女性に目移りするのだろうか。

私だけを見て欲しいのに。

この気持ちに気がついたのは、4年前の事件の時に、彼に助けてもらった時だった。

その前からも似た気持ちはあった、いつも一緒に過ごしていた彼、こんな暗い性格で虹彩異色という瞳まで持った私、同じくらいの年の子達からは格好のイジメと言うか、そんな対象になっていたときに彼だけが私の傍にいてくれた。

私は特殊な生まれで、先祖の記憶が時々夜に蘇ったりして、眠れない時が合ったりした。

その時に彼は決まって私に連絡をしてきてくれて、泣いている私を安心させてくれた。

心の奥底に抱いていた感情が、ただの幼馴染から大切な男の子に変わるのに時間は掛からなかった。

でも、あの事件の時に私は無力さも味わってしまふ。

彼が助けに来てくれなかったら、私は、あの日、命はなかっただろうから。

外の様子がおかしくて疑問に思っ外に出た私は、燃えている町や破壊されている建物を見て、恐怖という感情に支配されてしまったのだ。

そして、私は変な機械に【ガジェット】と呼ばれている機械によって、命を奪われそうになった瞬間。

『俺の大事な幼馴染に手を出すんじゃないっ！！』

そういつて私を颯爽と助けてくれた彼、その時に、私は彼の事が本当に好きになってしまったんだろう。

それから数体の機械に襲われたのに、彼が全部蹴散らして（アインハルトの乙女補正が入っておりますので、ダンが横島並みの卑怯な手段を講じてガジェットを撃墜した瞬間の映像は削除されています）くれて、避難所まで無事にたどり着けたのだから。

それから私は、それまであまり真剣に修め様としなかった覇王の武術を修める事を決意した。

彼の家で、夕食をあまり一緒に食べれなくなったりしたけれど、でも、彼の隣にいたいという思いで私は今も耐える。

私は彼を守れて、彼も私を守ってくれるって言う対等な立場に、私は居たいのだから。

ただ、貴方は…… 夜にストリートファイトを行って、人に迷惑を掛ける私を、どう思いますか？
そう思ってしまった。

そんでもって夜になり。
俺はいつものように店に出るのだった。

「こんばんは、ダンくん」

「お、ギンガさんじゃん、らっしやい！」

とつくに晩飯時は終わって、客が引いた時間帯を見計らったようにやってきたのは【ギンガ・ナカジマ】さんというとても綺麗で、素晴らしいスタイルを持つおねいさんである！！

相変わらず素晴らしい乳でっす！！ぐへへへええ！！

と言いたくなる気持ちと緩みそうになる表情を俺は、気合で抑えながら彼女の元に注文をとりに行く。

いつもは妹さんのスバルさんを含めた他の妹さんたち、親父さんであるゲンヤさん達一緒に居るんだけど、たまにギンガさんが一人でここに来るんだよね。

ただ、彼女達が来るときは、偶然か決まってアインハルトがいない日なのが気になる……。まるで、何かの修正を受けている感じのような……

き、気のせいだね？ 彼女達も原作キャラだ！とかなんて……

「注文はなんっすか？」

「それじゃあ、いつもの業火野菜炒め、ナカジマ盛りでお願いできるかしら？」

「了解っす、ナカジマ盛りっすね」

ギンガさんの注文を確認後、俺は爺さんに注文を伝えるんだけど、ここでナカジマ盛りについて説明しておこうと思う。

ギンガさんを含めたナカジマのお嬢さんたちは健啖家という言葉が、裸足で逃げ出すくらいに食うんだよ。

最初に見たときは流石に引いた。

何しろ業火野菜炒めを10人前を普通に平らげた上に、スイーツを食べに行こうとか普通に会話していたんだから。

その時のゲンヤさんの表情は形容しがたい、複雑なものだったんだけど、そりゃそうだろう。

自分の娘が、外食して普通にとんでもない量食べているんだしな。

それから、ナカジマの皆さんが家を良く利用してくれるご贔屓さんになってくれたので、爺さんがナカジマ盛りなるものを作ったのだ。

量が単純に10人前の業火野菜炒めにカレイの煮付け、かぼちゃの煮つけの各種定食なんだが、爺さんもどこで10人前の量を盛り付けることが出来る皿を見つけてきたんだか……

そんなこんなで、表のメニューには載っていない裏の注文でもあるナカジマ盛り、なんて物ができたのだ。

お客さんがギンガさん以外は居ない状況で、彼女がちょいちょいと手招きしているので近寄ると、彼女の横の椅子をポンポンと叩いたので隣に座る。

「うーん、やっぱり大きくなったね」

「そうっすかね？」

「うん、つい2、3年くらいまでは膝の上に乗せれるくらいだったのに、今は私に背が追い付きそうじゃない」

「今でも大歓迎です」

「クスクスッ、コラ、この甘えん坊さん」

うん、まあ、なんだ？ 照れる。

彼女の顔は弟の成長を喜ぶ姉、と言った様子で、俺の頭をかいぐりかいぐりと撫でてくるんだから。

爺さんやお袋に親父達は微笑ましい物を見る感じで、見守るばかりで何もしてくれない。

照れを誤魔化す代わりに俺は、言っているんだけど、彼女は俺の額にこつんと拳を当てて、くすくす笑っているのだった。

「ダン、出来たぞ、ギンガの嬢ちゃんの所に持って行ってやれ！」

「あいよー！」

ニヤニヤとした笑みを浮かべる爺さんが、常識ではまず考えられない量が盛られた野菜炒めを完成させる。

それから俺は、まだ頭を撫でてくるギンガさんから逃れてから、危なげなく皿を持つが、ずっしりとした重さに見ただけで腹が満たされるこの感覚、何時になっても慣れない。

だけど、ゲンヤさんはいつもこれを味わっているんだよなあ。なんて考えるけど、なれたんだろなあ、とも同時に考える。

「業火野菜炒め、ナカジマ盛りお待ちっす!!」

「ありがとう」

それから俺はギンガさんにそれを届け、カウンター内に戻る。

「オイ、ダン」

「なに？」

「お前もギンガの嬢ちゃんと一緒に食っちゃいな、ついでに用意した」

「お、ありがとう」

戻ってきた俺をいきなり爺さんが声を掛けてくるので、俺は疑問顔で爺さんを見上げる。

爺さんが、俺に定食に使う盆を渡してきたから、受け取ると視線を感じる。

俺はそっちの方をチラリ、と見れば。

笑顔のギンガさんが手招きしているのだった。

そして、爺さんを見れば、ニヤニヤとしているので、恐らくは【可愛がられながら食って来い】とでも言いたいのだろうか。

え、俺の選択って？ 決まってるじゃないか！！

「ギンガさん俺も晩飯なんですけど、一緒に食って良いですか!？」

美人のおねいさんに可愛がってもらえるならば、どんな食事でもパラダイスだ!!

こういう時はまだ押さないことに感謝できる!! おねいさんにセクハラまがいのことをして、笑って許してくれるんだしグフツツ!

それから俺は、ギンガさんと一緒に楽しい食事をした後、鍛錬と
いうか能力を使いこなす為の訓練を行う。

その後で、風呂に入って部屋に戻ったときに、俺は自分が持つて
いる携帯端末にアインハルトからの着信があったことに気が付く。

だけど、俺が何回か掛け直しても繋がらないこと、それに俺は焦
れ始めたのだが。

まさか、アインハルトが夜にあんなことをしているなんて、この
時の俺は知る由もなかった。

アインハルトがやっていたことはって？ 間違いなく俺と爺さん
が説教をする内容だったのは、間違いのないな。
うん。

心配かけさせやがってあのバカ……！

第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高でっす！年下は愛でるもの、タツ子

次回辺りで、vivid本編に入りますが、ヴィヴィオの出番はもうちょい先ですね。

ただ、ダンはとっくに逃げられない、ということに気が付いていない。

と言うことには、今回の話で、一目瞭然ですね。

何しろギンガに弟分として、愛でられている時点でダメだし、ナカジマ一家と知り合いな時点でもダメと言うことに、彼は永遠に気が付かないでしょう。

第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを…… 強くなりたくて挑

物語が動き出す数週間ほど前のStヒルデ魔法学院にて、一つの邂逅があった。

初等部の少女達三人が本を持って歩いているのだが、その歩みは危なっかしいと言えるものだった。

時折ではあるが本の重みに耐えかねているのか、ふらつきながらバランスを必死で取っていた。

仲も良いのか、少女達は談笑しながら歩いていくのだが、階段を上り始めて半分ほど行った時にそれは起こった。

「っ！あ！！」

「きっ！？」

「ヴィヴィオ！！コロナ！！」

上っていた少女達のうち、二人、ヴィヴィオとコロナ、と呼ばれた少女達が階段を同時に踏み外して落下していくのだ。

少女達が踏み外したことに顔を真っ青にさせて、絶望、という感情に彩られた声を上げる額の上にリボンをしている少女。

まだ2人はこれから自分の身に起こることを自覚していないのか、呆然とした表情になっている。

自分の友人に起こる悲劇を見たくない、といった様子でリボンをつけた少女は目をきつく閉じ、落ちていく少女達も自分たちの身に起こることの覚悟を決めた瞬間。

「まったく、あつぶねえな」

「へ、へう？」

「え、えあう？」

なんとなく気の抜けたような声が聞こえたと同時に、少女達は疑問と言う感情が先に浮かび上がる。

階段の上に居る少女は、自分の友人に破滅を齎す音が聞こえないこと、落ちていく少女達は自分の体が、暖かくて頼もしささえ感じる何かによって受け止められていることだった。

ぶっちゃけ、少女達を受け止めたのは、ダンである。

それが数週間前、ダンが中等部に上がる前に起こった出来事である。

偶然図書館（の新任の司書のおねいさん目当てと言う用事）に用

事があつた彼が、受け止めたのだが。

これが後にどう影響を及ぼすのか、能力を自分で大幅に制限し、
答えを与える力も無いこの時の彼には、分からぬことでもあつた。

「vividって何だろう？」

「第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを…… 強く
なりたくて挑むんなら家の爺がちょうど良かったのにねえ……」

今は夜中の2時近く、俺は未だに連絡が取れないアインハルトへと携帯端末を操作していた。

店を閉めた後くらいから、爺さんや親父達が夜の町へと出発、アインハルトの捜索を行ってくれている。

既に家には向かったらしく、彼女が家にいないことは確認済みでもあった。

「くそっ…… やっぱ、あの時に問い詰めておくべきだったってことかよ……」

夜に女の子から連絡があって、その後に連絡がつかないこと、俺の頭に最悪に近い考えが浮かぶ。

それと同時に浮かんでいるのは、昼間の彼女の様子、強ばった顔に体、隠している何かが、俺に迷惑が掛かりそうだとか、勝手に考えて隠していることがバレそうになった時に決まって浮かべる彼女の顔。

さっき爺さんと親父に連絡したら、まだ見つかっていないとか言っていたが、爺さんの方ではなんか、何人かのチンピラと思われる男共の悲鳴が上がっていたんだが、まさか爺さんに喧嘩を売ったバカがいたのか……？

きちんと極楽にいけると、良いよなあ……（注…死んでません。

それから再び彼女の端末に掛けた瞬間、ついにそれが開かれる。

「アインハルト!!?」

『ご、ゴメンねダンくん』

「つて、は? す、スバル、さん?」

俺は珍しいというか、この世界に来てから始めて間抜け面をさらしていただろう。

何しろ、俺がアインハルトに掛けた携帯端末に出てきたのは、ギンガさんの妹の一人であるスバルさんだったんだし。

正直に言って驚愕というかと言うか、なんと言うかである。

幼馴染の見慣れた顔が出てくるかと思ったら、常連さんの顔だったんだし。

『うーん、この際だからダンくんにも説明しておくね』

「う、ういっす……」

それから聞かされた言葉の数々を聞いて、俺は脱力と同時に怒りが浮かび上がってくる。

あんの阿呆！小さい頃からどっかがズレた奴だとは思っていたが、まさかあんなこと、ストリートファイトをして強さを試してたなんてよ。

しかも連絡がつかなかった今日は管理局員に喧嘩を売って、しかも、やられて夜中の道端で気絶していたなんてな。
ったく！

その後は爺さんや親父達にも同じ様に連絡、事情を伝えた2人も怒ったような様子を見せた後、明日にまずは俺が迎えに行くことで決着が付いた。

覚悟してろよ、アインハルト……！！

心配、心配掛けさせやがって！

それから俺は、スバルさんが指定してきた時間、午前8時にナカジマ家の居間でアインハルトが下りてくるのを待っていた。

ゴゴゴゴ……！

と怒りを漲らせている俺、無論のこと、我が家では爺さんに親父にお袋たちも同じ様な様子で待ち構えているのは言うまでもない。

『あ、あの、やっぱり、先に入ってくれませんか？』

『ダメだ、あんなにお前さんの端末に連絡を掛けた上に、あん時の、ダンのあの顔のことも見てるんだ、お前がまずは顔を見せて安心させてやれ』

『まずは、謝って、それから怒られ様ね、ダンくんだって、貴女にイジワルしたくて怒る訳じゃないんだから』

『それに大事な幼馴染なんでしょ？　まずは貴女が彼に説明しないといけないでしょうが』

『うう……』

なんてやり取りが聞こえてくる。

一人は聞き覚えの無い声だったけど、後の二人は聞き覚えがあるというか常連さんだし覚えがある、スバルさんとノーヴェさんだ。

恐らくは聞き覚えの無い声は、彼女達が言っていたティアさんって人だろう。

それから、戸惑いなのか、ゆっくりと扉が開いていく。

そこに立っていたのは、私服のワンピース（以前出掛けた時に俺が選んだ）を着ている彼女の姿、彼女の姿は俺に全てが知られたと言ふことによるものか、小刻みに震えていた。

「アインハルト」

「……はい……」

「正座」

「は、はい……」

ソファに胡坐をかいて座っていた俺の言葉に、素直にアインハルトは従って正座（因みに俺と爺さんが畳の上での座り方として教えた）をする。

「だ、ダン……」

「なんだ？」

「え、ゴメンなさい！！」

土下座、とも言うべき様子で謝ってくる彼女の姿を見れば、怒る気が失せてくるのはなぜだろう。

だけど、心を鬼にして!!

「ああ、だけどまずはだ、どうして、あんなことをしていたんだ？」

「……」

「答えられない、か？」

俺の問い掛けに返って来た彼女の返答は沈黙だった。

ただし、黙っていることに彼女自身が苦しさを我慢しているような表情をしているからか、俺に関わることもあるのだろうかね？

この阿呆…… などと考えながら更に彼女に問いかければ、彼女は小さくだけど確かに、躊躇いという感情を浮かべながら頷いていた。

「答えられないなら構わない、俺もお前が言いたくないことを無理に突っ込まないしな」

「……」

「だけど……」

「…… だけど？」

「この！！！！バカチンがあ！！！！」

「いたっ！！？」

俺はアインハルトの頭に拳骨をかましていた。

ゴッン！！と派手な音を立てて彼女の頭に炸裂、彼女も苦痛で表情が歪むのだが、俺は気にせず更に言葉を続ける。

「つたく、ストリートファイトで多数の人間に喧嘩を売ってしかも昨日はやられた上に夜の路上で気絶してただあ！！！！？」

「うう……！！」

「お前なあ！！見た目は今でも凄げえ良いんだし美人になるのが分る人間なんだよ！もしも変な奴に絡まれたらどうするつもりだったんだ！！？」

「ううヘッ？」

「言いたいことはまだあるけどな、俺の家で爺さんやお袋たちが待っているからな、俺からはこれまでだけ…… 一つだけ言いたい

し、言っておく」

プクツ、と彼女の頭に漫画調のたんこぶが浮かび上がり、俺はアインハルトの両肩を掴んで、揺さぶって言っていた。

感情に任せて言っていた言葉の中に、何かまずい言葉があった気がするんだが、気のせいとしておこう。

最後に俺がわざと切った所の言葉に、疑問の色を浮かべる彼女。

俺は一番言いたかった言葉を、彼女にぶつけるのだった。

「心配、掛けさせるんじゃないよ！」

「だ、ダン……？」

「大事な、大事な幼馴染なんだよ！お前は！！」

「―――――っ！！？」

あれ、何か言葉の選択を間違えたのだろうか？

アインハルトがズギュウウウン！！とか効果音が付きそうな位に、顔を真っ赤にしているのが気に掛かる。

それに扉の向こう側のスバルさんたちの気配が、ニヤニヤと言う

か、変なものに変わったから。

俺の言葉の選択が間違った可能性が高いなああああ！！！！

なんて考えながら、俺はアインハルトに付き添って警防署に行く
と、そこでお袋と合流。

それから全ての手続きが終了した後で、アインハルトはお袋から
【お尻ペンペン！！】のお仕置きをされた後、爺に親父とお袋の3
人からも説教を受けたのだった。

何度か助けを求めるとような視線がアインハルトから向けられてき
たが、俺はそれを全て無視して、スバルさんたちに迷惑料としての
俺特製業火野菜炒めなどを大量に振舞うのだった。

はあ、なんか、嫌な予感がこれからするよなあ。
なんて考えつつでもあったけどな。

第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを…… 強くなりたくて挑

後々で後輩の女の子達とのフラグが生きてくると言う、畏がWW

第4話 幼馴染の成長を喜んでいたら、それはフラグだったでござる！

アインハルトのやんちゃ発覚事件から数日、いつもの日常に戻った俺とアインハルトだが、強くなることに関しての鍛錬と言うか、そんなのは爺さんと俺を中心として行うことにした。

今まで制限していた能力群のリミッターというか、使用制限を解除して鍛錬の為のメニューを作ったんだよな。

魔力だけは未だに制限を掛けてギリギリBに届きそうなCランクとしていたりするが……これもバレたらやばいかなあ？

その際に何故か俺も一緒に鍛錬に参加することになったのは、疑問を感じざるをえない。

あんなに嫌がっていたのに、どうして付き合っているのかって？
それはな。

『ダン…… 私と一緒にトレーニングをするのは、いや、なんですか？』

といって前世で見たことのある某チワワの如きウルウル目で、俺をジーと見つめて来るんだよ！

あんな目で見られたらたまらないぜ！？ 俺が気が付いたらいつの間にか頭を縦に振っていたんだからな。

まあ、純粹な組み手に走り込みとかの付き合いをやっているんだが、やっぱ強くなってるっつーか、何時の間にこんなに強くなってたんだよ、こいつ。

「あの4年前から思っていますが、ダンはどうしてそんなに強いんですか？」

「俺の場合はあの爺だな」

「え、お爺様ですか？」

そう、俺が4年魔のあの日に戦えた上に爺が俺を部屋から叩き出したのも、生まれた時から俺がある意味で才能の塊だということを知って、小さい頃からずっと鍛えられたからだよ。

向かってくるアインハルトの正拳突きを俺は右手でいなす運動を利用して、左肘を彼女に打ち込む。

図らずもカウンターになった形だが、彼女は声をあげることもなくガードしようとする。

「ああ、俺は才能の塊だから、それを遊ばせるつもりもないし、五反田食堂を継ぐ条件の一つが爺を倒すことでもあるって言われてな」

「才能の塊という言葉には頷けますが、食堂を継ぐ条件がお爺様を倒すと言うのは、ちよつと頷けないものが……」

更に打ち込まれてくるアインハルトの拳、蹴り、これらを俺は全て回避、受け流していき無効化していく。

彼女の表情に一瞬微妙なものが浮かぶが、それはしょうがない。

それから数十分、俺達は組み手を行った後、登校する時間帯に近づいてきた所で止める。

「それじゃあアインハルト、また後でな」

「はい、後、ダン、その…… 今日の放課後、付き合っただけの用事があるんですけど……」

「ん、買い物か？ 了解だ」

「え、えと、は、はい……」

珍しいことにアインハルトの方から、放課後のお誘いがあった。こいつは出不精の性質で俺が誘わないと、休日も俺の家でバイトまがいの手伝いをしているしかないのだよ。

年頃の娘さんがこんな調子ではいけない！と思って、よく街に買

い物とか遊びに誘っているんだけど、こうして彼女の方から誘いがあつたのは初めてだ！

色々と成長した娘を見る感覚になっている俺を、変な目でアインハルトが見ていたんだが、まあ気にしないことにしておくとしよう。

）vividって何だろう？）

）第4話 幼馴染の成長を喜んでいたら、それはフラグだったでござる！）

そして時間が過ぎていき遂に放課後となる。

俺は隣の席で帰り支度をしているアインハルトに声を掛けた。

「そんじゃ、どこに行く？」

「はい、実は行く所は、もう決まってるんです」

「珍しさもここまで来ればすごい事になるな」

今日のアインハルトは、本当にどうしたんだろうか？

いつもならば俺が手を握って引っ張る形で彼女から、どこに行きたい、とか、そういうリクエストはなかったんだけどなあ。

だけど俺の言葉を聞いたアインハルトは途端に機嫌が急降下して、唇の先を尖らせている。

あ、拗ねた。

「……むう、私が行き先を決めていたらおかしいですか？」

「いや、そんなわけないぞ、ただ無茶苦茶珍しいと思ってな」

「そう、でしょうか？」

「お前、自覚なかったのか？」

唇を尖らせて、頬も少しだけ膨らませてからそういつて来るインハルト。

…… ちょっとだけ可愛いとか思ったのは秘密だ！

俺の言葉に小首を傾げるインハルトって、コイツまさか、いつも自分が行き先を決めていなかったこととか、出不精のこととかに自覚がないのかよ。

なんて考えていたんだが、次の瞬間に俺の頭の中は真っ白になってしまう。

「自覚は少しありました…… でも、貴方が私の手を握って楽しそうに引っ張ってくれる姿を見ると、私は十分すぎるくらいに楽しくて、幸せな気持ちを感じるんです」

「はへ？」

「だから、私は……」

「お、おうあう……」

僅かの上気した頬と、本当にそう思っていることを思わせてくれる表情。

はつきり言って、いつものクールビューティーと言えるアインハルトはどこに！？　と言いたくなってしまう。

アインハルトは自分の胸に両手を当てて、本当に幸せそうな微笑と共に俺にそう言っていた。

コイツって、たまにだけど本当に聞いている方が恥ずかしくなることを言うことがあるんだよなあ。

そんな感じの事を唐突に言い出すから、肉体年齢では同じ年で精神年齢では上のはずなのに、俺が彼女に翻弄されることがしばしばある。

「クスッ、これから先は、まだ、ヒ・ミ・ツ、ですよ」

人差し指を自分の唇に当てて、アインハルトはそういつていた。

小悪魔っ娘の如き笑みを浮かべて言っているアインハルト、そんな見るもの全てを赤面させてしまうそうなくらいに可愛い彼女を俺は自分の頬が赤くならないように必死でコントロールしていたんだが、アインハルトは俺の唇に自分の人差し指をくっつけて来ていた。

こいつって、こんな奴だったのか？　というか、あの時、スバルさん家で言った言葉の後から、こんな様子が増えた気がする。

「あ、ああ……　そ、そそ、その日が来るのを、たのしみにしてる」

「はい、楽しみにしてください」

思わず一歩引いた俺だが、アインハルトはそんな俺の様子も微笑ましいのか、ニコニコと微笑みながらそういつていた。

（いつか貴方に……　私の事を一番大切な女の子、と言わせて見せますから、だから、覚悟、してくださいね）

そんなことを考えているアインハルトの事を知らないままでな。

ダンとアインハルトが学校を出た後、ノーヴェはとあるオープンテラスを持つカフェにて、彼らを待っていた。

ただし、自分が呼んだ人間以外の者達もいる状態ではあったのだが。

「つて、どうしてお前らがいるんだよ!？ 呼んだのはチンク姉だけだぞ!！」

それから返ってくる彼女への謝罪と思われる一つの言葉と、別にこの場にいることを気にしていなさそうな言葉の数々、ノーヴェは思わず頭を押さえながら一度うめく。

そして、その後に自然と思い出していた、ダンが近くにいない時に彼女と交わした会話を。

『かつて…… 覇王イングヴァルトは、聖王女オリヴィエに勝つことが出来ず…… 彼は彼女を救えなかった……』

『だから時代を超えて、再戦って訳なのか?』

警防署の中でダンが母親のレンと共に手続きに出ている時間帯に出来た会話の切っ掛け、意外な事に話しかけてきたのは彼女の方からだった。

そのことに少しだけ驚いた様子を見せながらも、ノーヴェは応じているのだが、少しだけ彼女の様子が気がかりでもあった。

『…… 覇王の血はやはり時代と共に薄れていきますが、たまに私のように身体資質と記憶を受け継ぐ者が現れます』

『それで？』

『彼は、彼女に一度も勝利することがなかった記憶が、私の中に違ったイメージで流れ込んでくることがあるんです』

『…… どんなイメージだ？』

自分の言葉が聞こえていないのか、それともこれから返事が返ってくるのかが分らないが、アインハルトは静かに言葉を紡いでいていた。

そんな彼女の様子にノーヴェは疑問の色を浮かべるものの、すぐに彼女に問いかける。

それと同時に彼女は、一筋の雫を一度閉じられた目から流す。
これを見たノーヴェが驚く間もなく、彼女は大粒の涙を瞳に浮かべながら、ノーヴェへと向き直る。

『私が！私が弱かったから！彼を助けることが出来ずに、弱いわたしを守って、私の目の前で……！かれが！私にとって一番大切な彼が！命を……っ！』

『……………』

今は自分の自宅ともなっている家で見た彼らの様子、ノーヴェはダンとアインハルトの二人がお互いに、大切に想いあっている関係だとは分かっていた。

どう答えて良いのかが分らない。

それがノーヴェの率直な感想だっただろう、まだ彼女自身が本気で異性に恋心を抱いたことがないのだから無理もないといえる。

彼女が言ってきたイメージというのが、一番大事に想い、異性として思いを寄せている自分の想い人が目の前で【殺される】姿を、夢で見せられるというのだから。

大粒の涙を流して、しゃくりあげている彼女を見ていたノーヴェだが、一度首を横に振ると口を開いた。

『そのことも含めて、あいつと話してみたら良いんじゃないか？』

『ふえ？』

『ダンはさ、ギンガやスバルと一緒に五反田食堂に行ったときに話す程度だけどさ、お前がそれを話してくれるのを待っているかもしれないぞ?』

『……』

『今朝の事を見ても、アイツがお前の事をかなりしっかりと見ているのは間違いない、だから、さ、お前も』

『…………… 彼には、覇王の記憶のことは話していますが、このイメージだけは言ってます……』

覇王の記憶のことを、既に言っているといったアインハルトにも驚いた。

だが、ダンが死ぬ夢を話していない、という事を聞いたノーヴェは当然だとも考える。

自分にももしも彼女のような想いを寄せる異性が現れたとして、その彼に言えるだろうか。

彼が死ぬという夢を度々見ると言うことを。

自分であれば言えない。

『でもさ、それでも、ダンにそれを話してみろよ、覇王の記憶のこととは言っただろ?』

『はい』

『じゃあさ、一緒に考えてみたらどうだ？　ダンは間違いなくお前のことを思っているからさ』

『……………』

最後の言葉に小さく、自信がなさそうに頷いた彼女を見た。
だけど、ノーヴェは思う、アインハルトを本気で心配していた少年と、アインハルトという少女の思いが通じることを。

そして、それからダンは直面する。

「あの時助けてくれたのは貴方で、しかも先輩だったんですね!!」
「あの時はコロナとヴィヴィオを助けてくれてありがとうございます!!」

「ダン先輩！なのはママと一緒にお礼に窥います！だから、今度は自己紹介、してくれますか？」

自分がかつて助けていた少女と。

「ダン」

「は、はい……」

「年下趣味だったんですか？」

「それひつでえ誤解だからアインハルト！！」

という危機に。

第5話 え、ギンガさんに光源氏計画疑惑だって？

あはははっ！…まっさか

座り直してアインハルトとのやり取りも思い出し終わった彼女を見計らっていたのか、スバルとティアナが座っているテーブルに眼帯をした少女が座る。

「チンク姉、どうかしたのか？」

「ノーヴェ、来るといつていたのは、彼女、アインハルトだけではないのか？」

「ああ、そのこと、か」

チンクと呼ばれた少女は柔らかくも鋭い、という声でノーヴェに向かつて問いかける。

彼女達が合流する前に、言われていたのは紹介したい子達がいるという風に聞いていたからだ。

だからこそ、彼女は聞いて置く事にしたのだ、自分達がある少女に彼らを紹介しようと考えている者達が、自分たちのかけがいのない友人であり親友と言える少女、彼女を傷つけてしまう可能性があるのか否か。

という事を、

「チンクの警戒って言うか、そういうのも尤もだけど心配要らないよ」

「ん？ どうしてだ？ スバル」

「だって、もう1人の子は五反田食堂のダンくんだよ」

「ああ、ギンガによく懐いていた、あの不思議な少年か」

「そうそう、ギン姉お気に入りの子だよ♪」

「……………（いや、ギンガのあの目は気に入っているっていうよりも…… 獲物を狙う捕食者の目、つつーか…… ギンガの奴…… まさか、なあ？）」

スバルの五反田食堂のダンという言葉に、一気に警戒を緩めるチンク。

ぶっちゃけると、彼女を含めたナカジマ一家は約一名を除いて、月に一度通うという常連なのだから、信頼と信用といった関係は既に構築されていたのだ。

チンクとスバルのやり取りを聞いていたノーヴェは内心で、少し、以前にギンガが彼を見ている視線の事を思い出していた。

あれはなんだったんだろうか、そう思いながら彼女は少し前に見たドラマを思い出す。

「だったならば、今日の予定が合えば、ギンガも誘えばよかっただろうが……」

「うーん、ギン姉って忙しいからね、何しろアインハルトの事があった日の夜も管理局に缶詰だったみたいだし」

「……………（いや、まて、その日はギンガの仕事は9時くらいで終わってたはず…… ダンの奴からアインハルトのことがあった日も来てたって聞いたんだが、まさかシヨタコンの上に、自分好みにちよう…… いやいやいやいや…… 育て上げて、一番美味しくなったときにペロリ…… なんて考えているんじゃない?）」

かなり想像力が豊かと言うか、なんと言うかである。

一人で顔を赤くしたり青くしたりしている彼女を、ティアナは疑問と言うか怪訝に見ていて、他の人間達は面白いものを見る目で見ているのだった。

但し、ここで彼女の疑問にちょっとだけ答えれば…… 仕事だと嘘をついてまで一人で五反田食堂に行つて、ゆっくりじっくりと時間を掛けて、ダンと一緒に食事をしていた。
とだけと言えるであろう。

「 Vivid って何だろう？」
「 第5話 え、ギンガさんに光源氏計画疑惑だって？ あはははっ
！！まさかあ！！」

それから会話を続けようとしたときに、ティアナが少しだけ真剣な表情になっていた。

「ちょっと、三人とも良いかしら？」

「ん、どうしたの、ティア？」

「どうした」

「なんだよ」

周囲の目などを一瞬気にして小声にするように、とのジェスチャーをしてきた彼女に従って、表情を引き締める三人を見たティアナは言葉が続ける。

「その Dankun って子の事だけ…… 調べてみようと思うの」

「どういうことだ？ 彼は何の力もない、我々が守るべき民間人だ、あまりそういうのは感心できないことだが？」

「…… 本当に何の力も無い民間人ならね……」

「何か、気になることがあったの？」

言い放ったティアナの言葉に嫌悪感を表したのは、チンクであった。

チンクやノーヴェを含めた少女達は過去に、ある事件【JS】事件とも呼ばれるものを起こしているのだが、それは割愛させていた

だく。

その事件の後に管理局にて働いている彼女としては、傷害事件を起こしていたアインハルトはともかくとして、店に行けば自分達を暖かくもてなしてくれる。

そんな優しい少年の身辺を探ると言うことについて、良い感情を持てなくなっているのだった。

だが、チンクの威圧感すら窺った言葉をティアナは軽く流すと、どこか奥歯に物が挟まった物言いをして、それにスバルが純粋な疑問を投げかけるのだった。

「アインハルトから聞いたんだけど…… 4年前の事件、あの時にダンくんってガジェットを魔法も使わずに丸腰の、その、生身で結構な数を撃墜していたらしいの」

「なっ、に!？」

「う、うそ……」

「マジかよ……」

彼女の言う事件、第1話でダンが巻き込まれて、アインハルトを庇いながら撃墜していた存在の名前は【ガジェット・ドローン?型】と呼ばれる戦闘機械である。

無論のこと、魔法も使えない人間や、丸腰の人間どころか当時の

彼の年齢を考えれば、そんな戦闘機械を撃墜することなど【ありえない】としか言えない代物でも合った。

驚愕に彩られる3人の表情を見れば、その困難さが窺えると言える。

見た目は麗しく華奢な少女たちなのだが、その正体と言えば危険という言葉が裸足で逃げ出すくらいの実力者といえる、少女達なのだから。

だが、言葉が自分たちの中で落ち着いて来たときの彼女たちの様子と言え、信じられない。

という色がありありと張り付いていた。

「本当のことなの？ それって……」

「スバルの言う通りだ、幼馴染と言うことだろう？ あの時に巻き込まれた時に、一緒に逃げている際の記憶を混同させているかもしれない」

「だけど、アインハルトの奴はダンのことじゃ嘘は絶対につかない、そう思えるくらいに入れ込み具合だったけどな……」

そういつてほとんど信じていない様子を見せる彼女達だったが、ティアナは頭を抱えながら、更に口を開いていく。

「彼女に言われて、記憶も確かめさせられたから、間違いないわ……」

「記憶を見たのか……?」

「ええ、信じられないなら、私のあの日の記憶を見てください!!
って彼女に言われてね……」

「そう、か…… 私達も良く食堂を利用させてもらっているからな、
今度言った時にでもそれとなく聞いておくでしょう」

「ええ、お願い」

頭を抱えてうめくように言っているティアナと、考え込む様子を見せる彼女達だったが。

チンクが場を纏めるような発言を行った後、ティアナもそれに同調し、この話題はこれまで。

そんなものを含んだ表情で、彼女達は一度頷き合っていた。

「ノーヴェ! みんなー!!」

場に広がっていた深刻な話題がちやうど良く過ぎた辺りで、彼女

達の最初の待ち人が来るのであった。

アレから学校を出た俺とアインハルトは、目的地を目指しているんだが。
さっきから。

「で、どこに行くんだ？」

「着いてからのお楽しみ、ですよ」

「それで何度目だよ……」

俺が目的地は何処か、という事を聞いてもアインハルトは楽しそうに笑うだけで、答えてはくれないんだよね。
まあ、アインハルトが楽しそうだから良いかね。

なんて考えている間が幸せであったことを俺は知る。

何しろ、自分がとくに【原作】に関わっていることを思い知らされるのだから。

「あ、あの喫茶店です、待ち合わせをしている方々がいるんですけど、宜しいですか？」

「まあ、構わんが…… おりよ、ノーヴェさんにスバルさんたち……？ それにウェンディさん……？」

「知っているんですか？」

「ん？ ああ、アインハルトは知らなかったっけ、あの人達だよ、最近良く家を利用してくれて、しかも、ナカジマ盛りなんていう盛りを誕生させた人達ってのはさ」

「あの方達だったんですね……」

オープンテラスを持ったカフェをアインハルトが指したんだが、そこに揃う面子を見たと同時に俺の背中をいや～な汗が伝う。

博麗の巫女並みの勘が叫びだし、アンサートーカーまでもが【行ったらエライことに巻き込まれるぞ！！】と叫びだす。

俺はすぐに後ろに向かって全速全身！！を実行しようとしたのだ

が、何時の間にやらアインハルトは俺の手を握っていたのだから驚いた。

ほ、本当に何時の間に……

ただ、俺の言葉を聞いた後、最後に確認するように彼女達（特に胸を仇のように見ていたんだが……）を眺めるアインハルトの目が、ちよつと怖かったのは気のせい、気のせい、だよな？

「じゃあ、ダン、行きましょう？」

「あ、うん、ニゲナイカラ、テヲハナシテモラエタラ、アリガタイナア」

「逃げないって約束してくれたら、良いですよ」

「うん、約束するサ！」

そういうやり取りが合って放してもらえたんだけど、今度は腕とかを組んでない状態でぴったりと引っ付いてきたから、間違いなく逃がすつもりはないな。

俺はこれから起こるであろう出来事に、人知れず溜息をつくのだった。

それにあの初等部の三人の女の子って、なんか見覚えあるんだが、気の所為かね？

などと考えながら俺達は近付いていくのだった。

それから俺達は彼女達の近くに近寄る。

「アインハルト・ストラトス、参りました」

「こんにちはっす」

「お、来たな、2人とも」

凜としてよく通る、透き通ってさえいるアインハルトの声に、気の抜けたというか間の抜けた様な声だったと思う俺の声。

俺達2人を確認したノーヴェさんはニカッ、とした清々しくもある爽やかな笑みを浮かべて、あの日に出会ったティアナさん、いつ

も家を利用してくれるスバルさんも微笑を浮かべていた。

ただ、初等部の女の子たちが俺を【ぼーぜん】と言った様子で見ている。

やっぱり俺も見覚えがあるなあ…… 一人は金色の髪に紅と翠の虹彩異色の女の子、次は灰色に近い髪を飴玉を包んでいる包装のようなりボンでツインテールにしている少女、最後は藍色と言える髪に黄色のカチューシャ？ リボン？ そんな感じのものをつけた女の子……

うーん、喉の奥に小骨が引っ掛かったような感じだなあ……
どこで見たっけ。

「こいつらが、お前らに紹介したかった連中なんだけど…… ヴィ
ヴィオにコロナとリオ、どうかしたのか？」

「「あ、あの！！？」「」」

「お、おう……？」

考え込む俺と、俺達を指し示して彼女達に言っているノーヴェさん。

だけど、小学生3人組はノーヴェさんを見無視して、俺に一気に詰め寄ってくる。

そのどれもが興奮と言うか、どうしてか、藍色の髪を持った少女

てきてな、それを受け止めたんだよな」

「そうなんですか……」

「はい！あの時はヴィヴィオとコロナが大怪我を負う事を覚悟してしまったから、だから、あの時は本当にありがとうございます！！」

「私とコロナも、下手したら死んじゃう所だった所を先輩に救われました！だから、ありがとうございます！！」

「あの時からお礼を言いたくてずっと探していたんですけど、先輩だったんですね！でも、あの時は本当にありがとうございます！！」

「あ、いや、うん…… まあ大した事はしていないから、なあ」

正直に言って照れくさいというかなんと言うか……

周囲にいるスバルさんたちの視線も感謝の色というか、感心の色というかというものに変わっているしなあ、かなり照れくさい。

「そんなことはありません！」

「そうですよ！！わたしもコロナも危ない所を先輩に助けてもらっただんです！だから大した事なんですよ！！」

「先輩、コロナとヴィヴィオを助けてくれて、あの時はお礼も言わせてもらえなかったんです、だから今度は受け取ってもらいますよ」

「！」

そして、彼女達は俺の最後の言葉をより強く否定してくるんだけど、正直に言って、俺は本当に大した事はしていないんだよね。何しろ助けて、なんかほっとけなかったから彼女達が持っていた本を全部俺が持って、図書館に持って行った位なんだし。

ただ、落ちたりした衝撃が強かったのか、俺の名前を聞いてくることもなかったし、受け止めた時の事を褒めるばかりだったから、名前もスルーしていたというのが本当の所だったりする。

「だから、あの時に出来なかったちゃんとした自己紹介、してくれますか？」

「ああ、まあ、大丈夫だけど……」

恐らくヴィヴィオという少女だろう。

金髪の娘が、俺にキラキラとした瞳を向けて言って来る。

それに俺は頷くと、彼女はより表情を嬉しそうに輝かせて。

「わたしの名前は高町！高町 ヴィヴィオです！！ママも貴方のこ

とを知りたがっていました！ママの名前はなのほって言います！！」

ビシリ！

そんな音を立てて一瞬（コンマレベルで一瞬）俺の体は凍りつくのだった。

こ、この娘が、あの魔王さまの娘だとお！！！？

…… ここで知り合ってしまったのが運の付きなのか……
なんて、俺は考えてしまうのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3062z/>

v i v i d って何だろう？

2011年12月14日01時49分発行